

須永文庫について新しく書くことはまだいくらでもあるのですが、今回はいったん立ち止まり、これまで須永文庫絡みで発表されてきたことに対して修正や疑問点などを記したいと思います。

【図版への疑問】

まず、自分も関わっていながらこのようなことを書くのは気が引けるのですが、『須永文庫資料集 明治21・22年 須永元日記』（以下、『明治21・22年日記』と略）の図版の翻刻に疑問を覚えました。私が同書で担当したのは日記本文の翻刻と注釈、さらに「翻刻を終えて」で、図版を含む他の部分は他の方の担当でした。ただし、他の方の注釈も校正段階で私が修正を入れさせていただきましたが、図版のチェックまでは手が回りませんでした。。

そのため、今年3月1日に「須永文庫研究」二回目で自分なりに正しいと思う図版の翻刻を書きましたが、遠慮があつてそのことをはっきりとは書きませんでした。

まず、『明治21・22年日記』の図版ではV頁に「14 古筠先生詩書巻」が紹介されています。小笠原島に抑留されていた金玉均が須永元に贈ったものです。

図版では、冒頭の二か所は以下のように翻刻されています。便宜的にA、Bと
します。

A「雲山浩渺

小笠原島夏日為試補腕寄贈□我者」

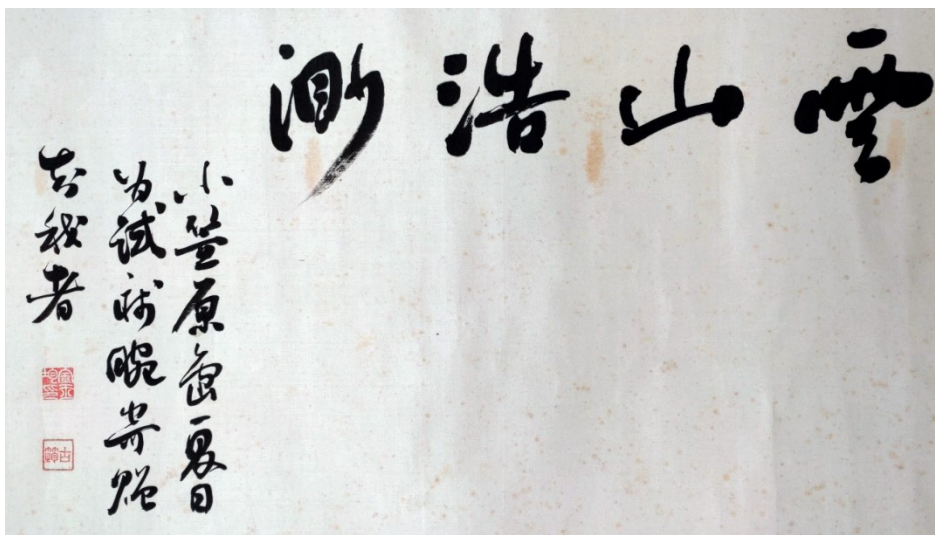
B「朱鳥玄武順陰帰 子孫備具居中央

学賦鏡銘半不成」

【知我者再論】

しかし、Aの落款部分、9字目の「補」は「病」ではないかと疑い、□部分は「知」だと思いました。そのため、「須永文庫研究」二回目では以下のように書きました。

「小笠原島夏日、為試病腕、寄贈知我者」



実は今年1
0月に汲古
書院から出
版された
『転換期に
おける東ア

ジア文化交流と漢学 二松学舎大学東アジア学術総合研究所日本漢学研究センター 日本漢学研究叢刊 4』（王宝平、町泉寿郎編）所収の「須永元と亡命朝鮮人の漢詩文交流」（茂木克美）に事実上修正した翻刻が載せられています。読点が違うところがありますが、同論文では「小笠原島夏日、為試病腕寄贈知我者」としています。

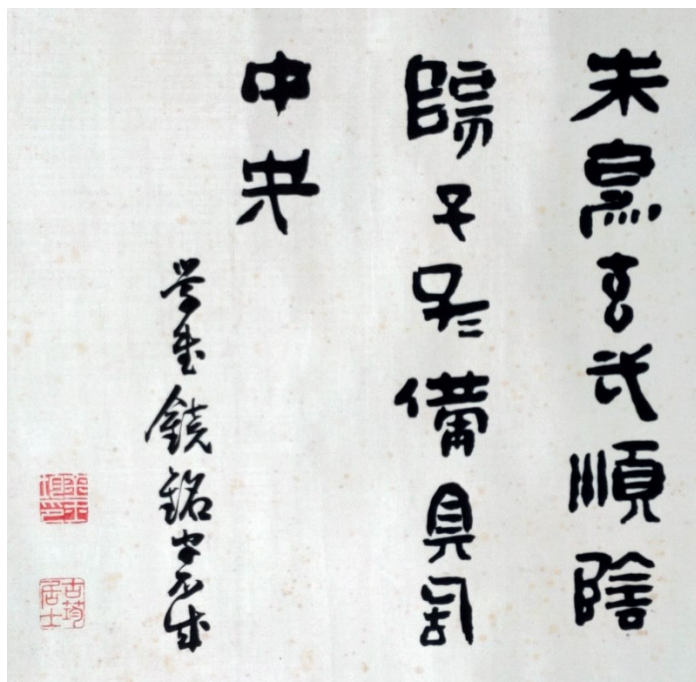
【古鏡銘文再論】

一方、Bの本文、7字目の「帰」は「陽」ではないかと思いました。

詳しくは「須永文庫研究」二回目を読んでいただきたいと思います。

「古筠先生詩書卷」は、当時小笠原と本土間を往来し、金玉均の連絡役を担っていた亡命者の柳赫魯が運んだ可能性があります。「須永文庫研究」四回目で

書きましたが、須永日記の明治21年1月31日の記述に「訪山田惟一、受取岩田氏手翰并揮毫」とあります。山田惟一は柳赫魯のことです。



【一掬之涙で修正】

天
氣

日九十月

談

朴泳孝

受

今年十月十日、余は東京に在りて、
 讀新聞紙、知日韓新條成矣。韓
 國、為日本之保護國。是韓國內
 外之政、皆在日本政府之指掌。
 直以書與朴泳孝吊之。余為我國
 欣之、為朴泳孝不能一掬之淚也。
 我國欣之、為朴泳孝不能一掬之
 淚也。

7月17日の「須永文庫研究」八回目と、8月6日の「須永文庫研究」九回目で、明治38年の第二次日韓協約に絡み、須永が朴泳孝の心情を思って涙する日記の記述を紹介しました。

その際、「讀新聞紙、知日韓新條成矣。韓国、為日本之保護國。是韓國內外之政、皆在日本政府之指掌。直以書與朴泳孝吊之。余為我國欣之、為朴泳孝不能□一掬之淚也。

噫。」と翻刻し、□は若干の保留をつけながら「無」と推測しました。

今年10月に刊行された上述の「須永元と亡命朝鮮人の漢詩文交流」でもこの記述が紹介されています。句読点で若干違うところがありましたが、「是韓國內外之政」の前に

「自」の一字が付け加わっていました。もとの史料の写真を載せますが、確かに一字（矢印の先）あるかも知れません。意味もその方が通じるでしょう。

いずれにせよ、須永が朴泳孝の心情を慮って第二次日韓協約を手放しでは喜んでいないことを示す記述です。

須永文庫の研究は先学の努力で進んできたものですが、疑問点はまだあるので、今後も先学への敬意を忘れず、一步ずつ前進していきたいと思ひます。

2024年11月3日 広沢有久

須永文庫資料研究室のアドレスは <https://sano-haku.com/sunaga-bunko/>